

# 組織目標評価報告書（平成26年度）

部局名： 資源植物科学研究所

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p><b>①教育領域</b></p> <p><b>①-1 目標</b></p> <p>国内外からより多くの大学院生が入学するよう、学部生を対象に当研究所の紹介等を積極的に行う。入学した学生にとって満足度の高い教育・研究指導になるよう、授業や研究の実施体制や内容について見直しを行い改善を諮るとともに、キャリア支援を促進する。</p> <p>「教育実施体制」 (1)博士後期課程学生への授業の実施体制の見直し。</p> <p>「教育方法・内容」 (2)博士前期課程学生への講義内容の検討 (基礎的な内容をバランス良く網羅したカリキュラムや教員の研究紹介を中心とする講義課目の新設等) (3)留学生ならびにグローバル化に対応した英語教育の積極的な導入</p> <p>「大学院生獲得に向けた取り組み」 (4)「大学院検討委員会」による当研究所や学外での進学説明会の開催。種々の広報活動の実施(H24より継続)</p> <p>「学生支援」 (5)「若手キャリア支援センター」の協力を得て「出前キャリア相談会」の開催(H24より継続)と積極的なサポート。</p> <p><b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>(1) 新授業体制の構築と来年度での実施。 (2) 進学説明会や出前キャリア相談会の実施。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>「教育実施体制」 植物研教員が行っている研究の最前線情報を、英語を用いオムニバス形式で提供する新科目を創設し、H27年度より実施予定である。</p> <p>「教育方法・内容」 上記の新科目は、植物研の全グループをカバーし、研究の最新情報を英語で提供することから、留学生に質の高い教育科目になる。日本人学生にとっても、留学生とともに英語でのプレゼンや質疑応答を学ぶことができる。</p> <p>「大学院生入学者増に向けた取り組み」 平成26年度の新たな取り組み(国際基督教大学での開催、隣県での説明会開催)を含め、大学院検討委員会により積極的に大学院生への情報提供を行った。さらに、在学期間中の学生のケアのために、学生と会合を持ち、学生の要求に沿った対応を行った。 (1) 大学院説明会の種類と開催回数：所内6回、所外3回(高松、庄原、東京) (2) 学外で行ったものの内容：国際基督教大学での出前講義と説明会の開催 (3) 開催情報の発信方法：ポスター、PSS Netメルマガでの配信、岡山大学HP、IPSR-HP、グーグル広告、フェイスブック広告</p> <p>「学生支援」 ・若手キャリア支援センターの協力を得て「出前キャリア相談会」を以下のとおり開催した。 4/21、6/13、9/12、11/14、2/17の計5回開催 ・若手キャリア支援センターの要請のもと、全学を対象として、アカデミックキャリア支援のための講演会を植物研所長ならびに副所長が講師となって行った(平成27年1月10日)。</p>
<p><b>②研究領域</b></p> <p><b>②-1 目標</b></p> <p>当研究所は国内の「植物遺伝資源・ストレス科学研究」拠点に認定されている。拠点としてさらに研究のレベルアップを諮ること、国内外の知名度をさらに高め国際拠点をめざす取り組みを行う。一つは、教員採用人事でテニュアトラック(TT)制度を全面的に導入した結果、研究体制の見直しが必要となっており、教員の能力・意欲・独創性が発揮される体制の構築をめざす。もう一つは、国際共同研究体制(派遣と受け入れ)を整備し実施する。さらに、初の試みとして、国内外の若手研究者を対象とした研究トレーニングコースを本研究所で開催する。</p> <p>「研究実施体制の見直し」 (1) TT制度導入後に適した研究体制の再構築</p> <p>「共同研究拠点活動」 (2) 共同研究の推進 (3) 植物ストレス科学に関するシンポジウムとワークショップの開催 (4) 国際共同研究の公募の開始と実施 (5) 国際公募の研究トレーニングコースの開催 (6) 次期拠点(H28年度以降)の申請に向けた準備と申請書の作成。</p> <p>「東日本大震災支援プロジェクトの推進」 (7) 塩害および放射能被災農地の復興に向けた研究の推進(H23より継続)</p> <p>「外部資金等獲得の推進」 (8) 科研費申請の支援と推進 (9) 外部資金獲得の奨励</p> <p>「岡山大他学部・センターとの連携強化」 (10) 若手教員企画による農学部との研究交流会の開催(H24より継続) (11) 震災支援プロジェクト(放射能汚染農地の復興)の実施体制として、昨年度までの自然生命科学研究支援センター(光・放射線情報解析部門・鹿田施設)に加え、農学部および環境生命科学研究科の教員が参加する共同研究体制での実施 (12) 農学部教員との連携による「ジョモケニアツタ農工大学」の研究・教育支援(H22より継続)</p> <p><b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>(1) 新研究体制の整備。 (2) 各種集会の開催。 (3) 科研申請率(継続を含む)100%。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>「研究実施体制」 ○任期付き准教授の再任審査、テニュアトラック教員の中間審査を実施 ・任期付き准教授5名の再任審査を実施し、全員の任用更新を決定した。また、テニュアトラック教員(助教)1名の中間審査(着任2年半)を実施した。 ○ユニット制をより機能させるための研究体制の再構築 ・研究施設の改築、改修に合わせて、現在のグループ重視の配置からユニット重視の配置に見直し、移転計画を策定した。</p> <p>「共同研究拠点活動」 ○共同研究課題採択と実施 ・共同研究を4つのテーマで公募し、応募のあった57課題中、55課題を採択して共同研究を実施した。 ・平成27年3月3日に共同研究成果発表会を開催した。 ○ワークショップの開催 ・平成26年11月4日(参加者104名)、平成27年1月31日(参加者30名) ○シンポジウムの開催 ・平成26年4月11日(参加者50名)、平成27年3月2日～3日(参加者157名) ○国際共同研究の実施 ・ジョモケニアツタ農工大学(ケニア)をはじめとして、オーストラリア、ベトナム、インド、中国、マレーシア、スイスの研究機関と共同研究を行った。 ○国際トレーニングコースの実施 ・植物科学研究における若手研究者育成を目的に、8/25-29の5日間、国内外の6名の研究者に対して教育訓練を実施した。 ○本拠地がカバーする研究領域の研究者ネットワークの構築に向け、植物研で立ち上げた「植物ストレス科学ネットワーク(PSSnet)」の運用体制を安定的なものにし、登録者拡大とメルマガジンの充実に努めた。(登録者総数605名) ○国内の共同利用・共同研究拠点間の連携を図るために、当研究所がイニシアティブをとり、農学系3拠点(岡山大植物研、鳥取大乾燥地研究センター、筑波大遺伝子実験センター)でシンポジウムとワークショップを開催し、連携への合意と具体的な連携方法を決定した。 ○国際拠点体制の構築に向け、海外拠点との連携を具体的に化するために、海外の優れた関連研究機関を複数厳選し、教授会メンバーで視察し意見交換を行った。本企画は、大学改革推進事業として支援を受けた。</p> <p>「東日本大震災支援プロジェクトの推進」 大学機能強化戦略経費の配分を受けて実施した。現地において、地場産業の創出に向けた第一歩として本研究所で生産したオオムギを使用してビールを試験醸造した。また、高度放射能汚染農地での、植物試料中の放射線含有量の測定評価方法並びに汚染水からの除去方法を開発した。</p> <p>「外部資金獲得の推進」 【科研費】応募件数(新規)40件 採択件数20件(新規+継続) 教員数32 取得者率62.5%(H26.10月部局連絡会資料より) 【受託研究】18件 134,551千円 【共同研究】4件 2,800千円</p> <p>「岡山大学他学部・センターとの連携」 東日本大震災支援プロジェクトの福島放射能汚染関係は、学内の共同研究として行っている。プロジェクトの進展に伴い、今年度は環境生命科学研究科教員2名と大学院生1名が新たに参加し、鹿田施設とともに3部局の協力体制を構築した。 農学系教員との研究交流会を、本年度は植物研で開催した(10月31日)。また、ジョモケニアツタ農工大学の支援では、先方より若手研究員5名を受け入れ、植物研からは4名を派遣するとともに、農学部教員と共にJSPS-AASP拠点形成事業を実施した。</p>

③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
<p><b>③-1 目標</b></p> <p>「地域社会との連携」  (1)高校生を対象としたサマーサイエンススクール(実習プログラム)の企画と実施  (2)倉敷市の要請に応えて  ①倉敷市大学連携公開講座に参加  ②幼児・小学生・中学生・高校生の体験学習の実施  (3)当研究所の創立100周年記念行事の実施による岡山大学倉敷キャンパスの知名度向上のための取り組み</p> <p>「国際交流・協力」  (4)国際協定を締結している研究機関との研究交流の実施</p> <p>「社会貢献」  (5)東日本大震災復興支援プロジェクトの推進</p>	<p>「地域社会との連携」  (1)高校生を対象としたサマーサイエンススクール(実習プログラム)の実施(8/1:参加者22名)  (2)倉敷市との連携  ①倉敷市大学連携公開講座の開催(H26.10.18 2講座:参加者56名)  ②幼児・小学生・中学生・高校生の体験学習の実施  幼児レクテ摘み:4/21-4/25、参加者数1,268名  中学生職場体験の受入(1中学校 計4名)  見学の受入(小学校1校、高校4校、団体2団体 計116名(引率者含む))  (3)創立100周年記念式典及び記念講演会、記念祝賀会を10/21に開催し、記念シンポジウムを10/31に開催</p> <p>「国際交流・協力」  (4)国際協定を締結している研究機関等との研究交流の実施  【招へい】  ・ジョモケニアアッタ農工大学(ケニア)、クイーンズランド大学(オーストラリア)、ハノイ国立農業大学(ベトナム)、国立植物ゲノム研究所(インド)、中国科学院南京土壤研究所(中国)、マレーシア国民大学(マレーシア)  【派遣】  ・Institute of Microbiology ETH Zurich(スイス)</p>
<p><b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>各種企画の実施。</p>	<p>「社会貢献」  (5)東日本大震災復興支援プロジェクトの推進  現地において、地場産業の創出に向けた第一歩として本研究所で生産したオオムギを使用してビールを試験醸造した。また、高度放射能汚染農地での、植物試料中の放射線含有量の測定評価方法並びに汚染水からの除去方法を開発した。</p>
<p><b>【総括記述欄】</b></p> <p>本年度は、従来の取り組みに加え、特にグローバル化と若手人材育成のために、新しい企画や組織作りに取り組んだ。まず、大学院教育として、博士前期課程の全学生を対象に、研究所全グループの研究を英語で紹介する新科目を設定した(平成27年度より実施)。博士後期課程学生の教育科目については、来年度に検討を予定している。次に、本研究所が担う共同利用・共同研究拠点のグローバル化と若手人材育成のために、次に挙げる4項目のプロジェクト、(1)昨年度より開始した拠点としての国際共同研究(所内公募による派遣と受け入れ)の実施と公募体制の整備、(2)新規プロジェクトとして国際トレーニングコースの開催、(3)海外の優れた研究機関との連携・協定に向けた視察、(4)海外展開をしている農学系共同利用・共同研究拠点(鳥取大・乾燥地研究センター、筑波大・遺伝子実験センター)との連携強化のための共同ワークショップならびにシンポジウム開催と合意形成を行った。特に、国際トレーニングコースは、公募した若手研究者(日本人3名・外国人3名)を対象に、最新機器による分析法・解析法を実際のサンプルを使って学ぶとともに、世界トップレベルの研究者(英国より招聘)による講義と交流である。研究所のゲストハウスに5日間寝泊まりして行ったもので、参加者には大変好評であった。本企画は、研究所の存在を世界にアピールするとともに、若手研究者の育成と交流にも有効であり、来年度以降継続して行う予定である。また、本研究所が国内外の研究者を結びつけるハブとしての機能を果たすためには、海外の優れた研究機関との連携が必須である。このたびは、世界トップレベルの研究所の中から、交流実績や今後の研究展開を慎重に検討した上で、5つの機関(英国、米国、台湾、豪州)を厳選して視察し、情報交換・意見交換を行った。多くの優れたシステムを学ぶとともに、研究所間の連携の一步を踏み出すことができた。来年度は、第II期(H28~H33)の共同研究拠点の認定があり、上記の成果を生かし、大きく前進したいと考えている。なお、本年度は研究所創立100周年の記念式典・祝賀会を開催した。文科省をはじめ学内外の多くの方々に参加いただき、研究所のアピールをすることができた。以上の、国際化に向けた取り組みや100周年記念事業では、岡山大学の大学機能強化戦略経費のサポートを頂き進めることができた。感謝申し上げます。</p>	